

Title	民芸運動の理論と実践 : 柳宗悦の台湾観と沖縄観を中心に
Author(s)	林, 承緯
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49107">https://hdl.handle.net/11094/49107</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	林 承 緯
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 21699 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	民芸運動の理論と実践——柳宗悦の台湾観と沖縄観を中心に
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 治彦 (副査) 教授 上倉 庸敬 大阪芸術大学教授 藪 亨

#### 論文内容の要旨

本論文は、民芸運動において確立された民芸美論と地方文化論を検討し、日本の民芸運動が台湾にもたらした影響を明らかにすることを目的としている。本論文は、序論と結論を除き、六章から構成されている。

第一章「柳宗悦の思想形成」では柳宗悦の生い立ちと家庭環境に関して文献資料を通じて検討している。また、柳が生きた時代の背景と社会情勢が人格と思想の形成に与えた影響を検討し、その思想形成の道筋と白樺派の中での柳の位置を考察している。第二章「民芸論の誕生とその特質」では日本における工芸の概念の形成と発展について史料に基づいて検証し、「工芸」と「芸術」、「工芸」と「工業」の比較を通して工芸の概念を明らかにしている。次に、柳が提起した「正しき工芸」の十一箇条にわたる法則について一つ一つ考察を加え、柳の民芸理論の中で具体的に論じられた民芸美の特質を手掛かりとして、柳自身の美意識を探っている。第三章「民芸運動における地方」では、柳宗悦の学問に対する関心の変化を糸口として、柳の地方文化論の形成過程の把握を試みている。続いて、柳が地方と都市をそれぞれどのように理解したのかについて考察している。第四章「柳宗悦の沖縄論」では、柳宗悦が理想とした地方「沖縄」を事例として、地方と民芸との関係を分析している。第五章「柳宗悦の台湾論」では、柳と台湾との関係に重心を置き、台湾の文化体系と工芸の歴史背景を概観し、次に僅かに残る史料を根拠として十七世紀から日本統治期までの台湾工芸の全貌を概観し、台湾工芸発展における重要な諸段階について論じている。また柳が台湾で行った民芸調査について分析し、柳の台湾民芸に対する印象と認識を確認し、台湾がもつ「民芸」と「文化」を通じて民芸理論に存在する地方性の特徴を検証している。第六章「柳宗悦と顔水龍」では、民芸運動の主導者柳宗悦と台湾工芸復興運動の先駆者顔水龍のとの比較を行っている。柳宗悦と顔水龍の接点と交流に触れ、二人の生い立ちと思想形成過程を比較している。さらに二人の工芸についての定義と工芸の種類および工芸思想の受容関係を明らかにしている。また、顔水龍が理解していた柳宗悦像と新作民芸論を取り上げて二人の工芸思想の異同を分析している。柳宗悦と顔水龍がそれぞれ主導した工芸運動を中心として実践の内容を比較し、二つの工芸運動の相違点を詳述している。最後に顔水龍の工芸復興運動が民芸運動から受けた影響を検討し、柳宗悦の民芸運動が台湾工芸に占める位置の確認を試みている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、柳が重視した「地方」という概念に着目し、台湾と沖縄を事例として、柳の認識における地方と民芸との関係を明らかにしつつ、柳が主導した民芸運動が顔水龍らを先駆者とする台湾工芸復興運動に与えた影響について考察したものである。本論では、先ず、柳宗悦の思想の形成過程をたどり、次に初期の民芸運動において確立された民芸美論と地方文化論を再検討している。柳における「地方」という概念に着目し、台湾と沖縄を比較することを通じて、その関係を明らかにしつつ、柳が主導的立場にあった日本の民芸運動が台湾の工芸復興運動に与えた影響を考察している。

柳宗悦と民芸運動の影響について、韓国ではかなりの研究が行われてきたが、やはり戦前に柳が訪れて活動したにもかかわらず、台湾では、工芸分野の研究者が少ない等の理由もあって、研究はあまり盛んではなかった。しかし、近年、日本統治期の研究が活発になるとともに、台湾の経済成長の結果、日常生活の美を再び重視するようになり、政府指導の下、「台湾生活工芸運動」という活動が始まった。このような時期に、柳宗悦と民芸運動の影響についての研究が、台湾出身の若手研究者によってなされることは、極めて有意義である。本論文の著者の、沖縄と比較することを通じて、台湾への民芸運動の影響を検討するという研究手法は独自のものである。申請者は、柳宗悦と民芸運動に関する基礎的な研究も着実にを行い、それを本論に有意義なかたちで組み込んでいる。

台湾の関係者のあいだでは、柳宗悦の名はよく知られているが、その思想と活動について学術的に論じることのできる人物は極めてまれである。今後、発展が期待される台湾近代工芸史・工芸論の研究分野で、しっかりした基礎の上に柳の台湾に関する活動と台湾工芸観を学術的にまとめた本論文の意義は極めて大きい。台湾における柳の活動に関係して残された史料は決して多くはなく、調査研究は困難を極めた。しかし、入手できる限りの史料は本論で徹底的に分析され、着実な柳研究の上に位置づけられている。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。